

特集

菅義偉政権

初の「選挙」の

～政局の焦点は衆院の解散

吉凶

時期だ～



▲第99代総理大臣に就任した菅義偉氏



憲政史上最長を誇った安倍晋三前首相があっけなく退陣。その後任の第99代首相には菅義偉前官房長官が就いた。派閥の力学で誕生した首相だけに、組閣では各派に気を使って清新さを打ち出すことはできなかった。それでも世襲議員ではない「たたき上げ」が好感され、内閣支持率は軒並み60%台半ば以上。滑り出し上々だ。しかし、「この高支持率はあくまで「ご祝儀相場」。71歳という年齢から、自民党内では来年9月までの「暫定政権」という見方が依然、消えていない。新首相がそうした空気を払拭し、本格政権を目指すには選挙で勝つことが至上命題。1年以内に任期切れとなる衆院をいつ解散するか。政局の焦点は総選挙の時期に移った。前半では今後の政局を展望し、後半では早期解散がささやかれる衆院選の行方を北海道も含め、記者3人に占ってもらった。

(10月3日現在、文中敬称略)

「ご祝儀相場」に沸く 自民で派閥台頭 菅総理は如何にして 主導権を握るのか

9月16日。組閣を終えた菅は「国民のため働く内閣だ」と胸を張った。だが、顔ぶれを見れば新鮮味に欠けるのは否めない。

政治の安定を考えれば麻生太郎の財務相、茂木敏充の外相続投は致し方ないにしても、ほかに9人が再任または閣内異動。これでは安倍内閣の「居抜き」と言われても仕方あるまい。初入閣組の5人も復興相の平沢勝栄に代表されるように滞貨一掃的色彩が強い。そして目玉を挙げるなら防衛相から行草相に横滑りした河野太郎か。菅

は「縦割り行政の打破」を掲げており、官僚にズケズケ物言う直球型の河野に突破力を期待したのだろう。

ただ、その河野は、かつて脱原発の急先鋒だったが、入閣した途端、持論を封印した経緯がある。そんなブレやすい人物が果たして海千山千の霞が関を相手に、抜本的な行政改革や規制緩和をやり遂げることができるのか。厚労相から官房長官に

なった加藤勝信も注目されている。大蔵官僚出身で、ここ数年で一億総活躍相、党総務会長なども歴任。答弁もそつなくこなし、菅は安定感を買ったのだろう。

しかし、安倍政権がコロナ対策で躓く原因となったクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」をめぐる対応では司令塔なのに右往左往した。国の危機管理を任せて大丈夫か。

派閥色濃い人事の行方

閣僚以上に派閥色が出たのは自民党役員人事である。総裁選でいち早く菅支持を表明して流れをつくった二階俊博が留任。以下、政調会長には選対委員長だった下村博文が横滑り、総務会長には元国対委員長の佐藤勉を起

用、選対委員長には国民運動本部長だった山口泰明が昇格した。これに国対委員長を続投する森山裕を加えれば、結果的に菅を支持した細田、麻生、竹下、二階、石原の5派がポストを分け合った。



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<http://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)